

「真言密教の現代化」をめぐって

大塚 秀 高

I、現代化とは

一、現代の超克

伝法院の研究課題は「真言密教の現代化」である。それはいまさら言うまでもないが、われわれはこの課題をめぐってこれまでさまざまな議論を展開してきた。毎年毎のテーマは違っていても、われわれの意図するところはただひとつである。それは「現代」との対話であり、そしてそのつきるところは「近代」の超克である。すなわち、われわれの時代に対して、われわれの密教はいかなる回答を用意し、あるいはいかなる問いかけをなし得ることができ、そのかを明らかにすることである。ひいては「近代」を超克することである。「近代」の超克とは、「近代」の構図（デカルト主義）を批判することに他ならない。なぜなら、「近代」の構図は、そのまま現代にストレートに引き継がれているからであり、その枠組（パラダイム）を転換することが、現代のわれわれの焦眉の課題だからである。

戦後、われわれの密教は、オカルトと同じ扱いを受けてきた。やがてそれは思想としての密教に関心が寄せられ、

弘法大師一千五十年ご遠忌をひとつのピークとして、静かな密教ブームが形成された。今もその流れ（オウム真理教事件による一時的停滞はあるが）のなかにわれわれの密教はある。しかしである。こうした一連の密教ブームはわれわれの力でなし得たものではない。それは自然発生的に、いわば時代の要請として起こったのである。確かに、一連の密教ブームは密教思想を社会の各層に、とりわけ思想界に広く知らしめたことは間違いないが、またそれは他方では自閉して現代性を失いつつある密教の実態をあらわにしてしまったのである。そのことは後でふれるであろう、またふれなければならないあの我が国と全世界を震撼させた「オウム真理教事件」に対するわれわれ既成仏教教団の姿勢に象徴されているだろう。

二、現代との対話

繰り返すが、伝法院の目的は、あくまでも密教の現代化である。それは換言すれば「現代」との対話である。そしてそれはわれわれの基本的スタンス（批判精神）に他ならない。「現代」との対話には次の事柄が含まれる。その第一は、「現代」という時代を定位することである。具体的には、「現代」という時代の特殊性についてである。そしてその時代を支配する価値観を相対化することが、われわれの課題である。第二は、宗教と社会との関係性を明らかにすることである。すなわち、宗教が社会的機能を有していると同時に、社会的機能を超越するという宗教の本質を明らかにすることである。第三は、「現代」という時代に対する批判である。その批判とは、いうまでもなく密教の立場からの批判である。具体的には、現代の科学技術文明全体に対する密教思想からの批判に他ならない。

まずは、「現代」という時代の定位についてであるが、それは非常に困難である。なぜなら、われわれが「現代」といったときには、それは既に過去の事柄として映じているからである。その意味では、われわれが「現代」として定位している事柄は論理的には全て過去の事柄にすぎない。こうした論理的矛盾は別として、「現代」の特殊性につ

いて論じるならば、それは科学知と技術によって構造化されている現代文明とその支配をうけている現代人の価値観である。それは世界を、あらゆる事物事象を科学的にとらえようとする価値観に他ならない。科学知とは、「合理性」と「客観性」と「普遍性」を旨とする「知」の体系のことである。この科学知と道具としての技術が結合し、そこに経済性という新たな価値観が複合連鎖的に関与しているのが「現代」という時代の中心的価値観に他ならない。すなわち、現代人の価値観の中心である。

宗教と社会とは、宗教と社会との「融合」と「対立」のダイナミズムを捉えたいということである。そもそも宗教と社会とは簡単に二分出来る問題ではない。われわれは（現代教学研究室）は、宗教は社会的機能を有していると同時に、社会的機能を超越しているという観点から、そしてその接点から宗教的価値観に基づく新たな社会的価値観を模索してきた。具体的には、さまざまな「社会問題」をライトモチーフとして、疲弊（自閉して現代性を喪失している）している宗教の活性化をねらったのである。例えば、「現代」の社会問題の根底にある「現代」の特異性を分析し、その中心を形成している「現代」の科学技術文明全体に対する批判を行ってきた。そして宗教的、とくに密教的価値観に基づく文化の再構築を謳った。それは科学技術文明によって葬り去られた宗教の復権であり、見えないものの復権（科学は可視的存在しか認めない）でもあった。すなわち、科学知の圧倒的な支配によって、文化の周縁に追放された全ての存在に対する復権であると同時に、またそれ自体が現代文明に対する痛烈な批判でもあった。

具体的な事柄を取り上げるならば、「生死の問題」がある。「現代」に於ける「生死の問題」は、そのほとんどが科学技術文明によって新たに惹起された問題である。脳死問題についても、臓器移植問題についても、また今日の環境倫理問題などで問われる問題も全ては科学技術を基盤とする人間の営みによって生じている問題である。それを人間の欲望が根底で支えている。

一九九五年三月に勃発した一連の「オウム真理教事件」は、宗教と社会との「対立」と「融合」のダイナミズムを論じる場合、それは格好のモデルである。誤解を招いては困るが、ある意味では「オウム真理教事件」は、閉塞する「現代」という時代状況を打ち破ったといえるだろう。とりわけ自閉して現代性を喪失している既成仏教教団を震撼させたことは間違いない。彼らの価値観（教義）は、現代を支配する価値観とはかなり異質に映じるが、その活動の中心は科学主義そのものであり、その意味では彼らもまた科学技術文明の支配から免れていない。

そもそも宗教は宗教そのものとして在るわけではない。われわれは既存の或いは伝統的な教団ないし寺院に関係することに於いて、無条件に「宗教なるもの」に関与していると錯覚しているかもしれないのである。宗教は社会的機能を有していると同時に社会的機能を超越している。すなわち、「宗教なるもの」とは、一切の常識を解体したところに成立する極めて危ういものである。いわばそれは山の稜線の上を歩くのに似ている。その自らの本質的な存在と役割を担うとき宗教ははじめて活性化を得るのである。いわば宗教は、いつの時代にあっても、本来的には文化の基層を支えているのである。

II、真言密教の現代化とは

一、伝統教学の解体と新教学の構築

さて、われわれはこれまで「現代」の特徴を、科学知と技術と経済の複合的な連鎖に求めて論じた。「現代」の特性とは、科学技術文明の圧倒的支配であることを繰り返し指摘した。そして現代化とは、「近代」の超克であり、それは同時に「現代」との対話であることを問題にしてきた。それはわれわれの真言密教の現代化にも敷衍できる事柄である。すなわち、真言密教の現代化とは、伝統教学の解体と新教学の構築に求められるのである。いわばこの命

題は教学の根本的な見直しを意味している。それはこれまで伝法院の公開シンポジウム等で論議されたテーマ（その中心は教学研究室）であり、敢えてここではふれない。

二、科学技術文明と密教との対話

現代化をめぐる最も重要なことは、まずは「現代」を圧倒的パワーで支配する科学技術文明と伝統的な密教との対話である。すなわち、それは科学技術文明にどっぷりと浸かり、その恩恵を享受している私という一人の人間の中心に置いて両者を両立しようのかという問題に他ならない。またそれは両者の間に共通の通路を確保する作業でもある。例えば、これまでのような、「現代」を特徴づける科学知の体系を分析思考的であるとして批判的に評価、それに対する密教の優位性のみを主張するような論法は（一見すると正論のようにみえるが）、それは「現代」という時代の現実からの逃避ではない。

現実問題として、「現代」のさまざまな社会問題に対して、われわれの真言密教はこれまでいかなる対話を確保したであろうか。例えば、生死の問題についてはどうであろうか。その「生死」が、今「現代」の科学技術文明の中で厳しく問われているのである。今年、法制化されようとしている「脳死問題」は、正にその典型である。かつて我々人類は、「脳死」と「心臓死」を分けて死をイメージすることはなかったし、他人の臓器を移植してまでも自身の生を長らえたいなどは考えもつかなかった。つまり、科学技術がそれを可能にしたのである。その現代状況の中で我々は活動している。

繰り返すが、われわれはこうした現実的な問題に対してわれわれの立場からの議論の確保があったであろうか。あったにしても、それは極めて非主体的な取り組みである。どちらかといえば忌避している状況にある。

科学的な、医学的な死のみが人の死ではない。真言密教の立場で捉える死と科学的な死は同じ位相で捉えることは

できないが、少なくとも両者における議論の確保は、ぜひとも必要である。確かに、われわれは「社会問題」に対して過剰に反応する必要はない。つまり、軽々に反応して結論を出さないということもわれわれ宗教者の一つのスタンスの取り方である。むしろその方が社会的には耐え難い苦痛を味わうが、それでも敢えて反応しないことに意義を見いだす事の方が重要である。もちろんその場合、反応しないと理由を明確にせねばならないことはいうまでもない。焦眉の問題は、われわれの主體的な取り組みである。われわれは死の問題のみならず、現代のさまざまな事柄にかかわる場合、私という一人の人間の問題として、真言密教が再解釈される必要があるだろう。そうでなければわれわれの真言密教の立場は確保できないはずがない。

弘法大師や興教大師の著作から、「死に関する問題」の箇所を便宜的に引用して、それを都合よく解釈したところで真言密教の立場が現代の課題にその立場を確保しているとはいえない。われわれにとって何よりも必要なことは、現代の「生死の問題」を、その特徴を定位すると同時に、それをわれわれの立場から批判的に捉える作業を行うことである。具体的には、科学的、医学的な知識のみが優先している「現代」の「生死の問題」に対する具体的な批判である。それは何も「生死の問題」に限定されない。この観点は、「現代」のありとあらゆる問題についてもいえるのである。

III、伝法院の十年をふりかえって

一、伝統教学の解体と新教学の構築はなされたのか

伝法院の目的は、繰り返し返すが真言密教の現代化である。伝法院が発足してから、この課題を目指して各研究室は活動を続けてきた。今もその過程の中にわれわれは在る。現代教学研究室は、「現代」という時代の定位に始まり、そ

の特異性を論じる中で、現代社会のさまざまな社会問題をモチーフとしてその本質について論じてきた。「現代」の特異性については一応の成果があったと自負している。その研究の経緯はこれまでの研究の報告にある通りである。真言密教の現代化をめぐることは、先の「現代化とは何か」「真言密教の現代化とは」の枠組みに従って論じる必要がある。まずは、伝統教学の解体と新教学の構築について問題にしなければならないことはいうまでもない。

問題は、伝統教学とは、何かであるが、明治以降、わが国の思想界は、西欧思想の、とりわけドイツ観念論の影響を強く受けて至っている。当然のことながら、東洋思想は、その殆どが西欧の観念論をモデルとして成立している。いうまでもなく、わが国の近代以降の学問はすべてこの流れの中にあるとみてはば間違いない。仏教学もその影響は免れないが、他方では真言宗などの宗学は西欧のインパクトを全く受けぬままに独自の世界を形成して、自閉して現代性を喪失している事もまた事実である。伝統教学の解体というとき、教学にはこの二面性があり、この二つのパターンを解体しなければならないことは周知の事実である。

問題は、何故に真言宗は、西欧のインパクトを受けなかったのかである。それは真宗や禅宗のようにである。真言宗の教えは、西欧思想になじまないからであろうか。それともそうではなくして、西欧の近代化がもたらした「現代」の閉塞状況を打破するためには真言宗の教えは必要不可欠のものとして人々から認知されているからであろうか。そこに真言宗の評価がある。これまでわれわれは好むと好まざるとにかかわらず西欧的思想の影響を受けてきた。既に述べたように西欧の近代知は、「現代」においてはその評価は大きく揺らいでいる。今こそ西欧思想の終結とそれに代わる新しい「知」の枠組みが求められている時なのである。こうした状況の中で新しい真言宗の教学は再構築されたのかどうかである。われわれはその事を厳しく問わねばならない。すなわち、まずは厳しい自己批判であるが、それなくしては伝統教学の解体（既に解体すべき教学はない）と新教学の構築は絶望的である。なぜなら、

「現代」の事物事象に対する真摯な取り組みは「教学」という名のもとで隠蔽され忌避され続けているからである。

二、現代との対話はなされたか

それは、「現代」との対話において最も象徴的に観察される。われわれは「現代」との対話を具体的な社会問題に求めて論じてきた。現代教学研究室は、研究テーマを、宗教と社会に求めて研究を行ってきた。宗教と社会という問題は、簡単に二分されうる概念ではなくして、両者は複雑に交錯していることを繰り返し論じてきた。

具体的な社会問題としては、「同和問題」がある。「同和問題」に関しては、われわれの立場からの独自の意見提示を行っているが、当初、この問題はわれわれの内発的動機づけによって、主体的に取り組まれた問題ではなかった。むしろそれは外発的動機づけによって取り組まれた問題である。いまだにその傾向は拭えない。そしてそのことは社会学の社会問題全般に対する姿勢でもあり、その意味では、いまだわれわれは自閉して現代性を失いつつあるというも過言ではない。